

千里地理通信

関西大学地理学・地域環境学教室会報 第95号

Newsletter of Department of Geography and Regional Environment, Kansai University

Contents

Page 1

巻頭随想

松井幸一

Page 2

卒業生だより

地理学教室で得たもの

井村 光

Page 3

特別寄稿

線路脇の思い出
アー

野間晴雄

Page 4

ベトナム巡検の思い出

上山結生

同窓会事務局ニュース

Page 5

1泊バス巡検報告

和歌山の自然と人文

上田佳典・

岡田渥生

Page 6-7

研究ノート

特別豪雪地帯における冬季の買い物弱者問題に関する地理学的考察

熊 偉超

Page 8

卒業論文及び修士論文一覧

Page 9

教室だより

秋の日帰り巡検のご案内

教室創設60周年記念事業

Page 10

随想

地理学と文学

石川雄一

Page 8-9

新専修生からのひと言

国際学会の旅を終えて

松井 幸一

8月中旬から9月1日までトルコでのIGU（国際地理学連合）と、ポーランドでのEAJS（ヨーロッパ日本研究会）の国際学会へと参加した。IGUは大学院生であった時に参加して以来2回目、EAJSは初めの参加である。久しぶりの国際学会は、準備は辛く現地は楽しくと色々あったが、思い出とともに旅行記的に書いてみたい。

IGUはトルコ・イスタンブールで開催され、私自身トルコに行くのは初めてであった。トルコといえばケバブ程度の知識しかなかったが、宗教的にみてもギリシャ正教・カトリック・イスラム教と移り変わり、その歴史・文化の多様さは建物や現在の市場の性格にも残っており驚くばかりであった。今回のトルコ旅行では学会参加以外に、ヨーロッパとアジアを分けるボスポラス海峡を船でわたることも大きな目的の一つであった。いくつもの観光クルーズに主にヨーロッパ側から乗船できるが、私たちはあえて公共交通の船を利用した。甲板まで入ると3階建ての巨大な船が概ね20分ごとに出発しており、これが片道300円程度と格安であった。アジア側の街では海鮮料理が豊富で、トルコ＝ケバブという印象は大きく変わる。特にサバを開いて半身そのまま入れるサバサンドは、野菜と魚と一緒に取れ美味であった。イスタンブールはイスラム教の信仰者が多いことから猫の街としても知られる。いたる所に猫がおり、学会の発表会場である教室にまで猫が自由に入り寝ているのには驚いた。街のどこでも猫と触れあえるのは大変楽しいが、多少のアレルギーがある私にとっては常に鼻をすする旅でもあった。

イスタンブールの学会後は、ドイツのフランクフルトへわたり、数日調査の予定であった。ただイスタンブールの最終日に体調をやや崩し、フランクフルトではホテルでの休養時間の方が長かった。ドイツでは様々なビールを楽しむつもりでもあったのだが、満喫とまでいかず次の機会に持ち越しとなった。万全の体調とはいかなかったが、ハイデルベルクの城を中心とした景観や、フランクフルトの金融都市・下町の景観的対比は見ることでできたので、今後

の授業に活用したい。フランクフルト滞在後は鉄道でベルリン、ポーランドへと陸路で移動した。

EAJSはポーランドの西部にあるボズナンという街で開催された。この学会はヨーロッパにおける日本研究のための学会であるが、日本研究ということもあり日本からの参加者も多い。今回は特に言語や教育、日本文化が多かった。私たち地理分野での発表はやや部外者感もあったが、発表時にはGISの認知地図への利用という専門的な助言をいただき、今後の分析の方向性に大いに参考になった。学会以外で驚いたのはポーランド料理の美味しさであった。ドイツと同じく基本的には肉とじゃがいもだが、私たちが食べた料理は味付けが日本人にもよくあった。ただし料理は一皿が大きすぎ、また常にパンが付いてくるため、前菜を食べてお腹いっぱいという失敗も何度かした。

学会参加を振り返ると、やはり国内学会以上に準備に時間がかかり、共同発表の大学院ゼミ生には大きな負担であったと感じる。ただ院生のスライドの出来、発表時の堂々たるプレゼンテーションは国際学会デビューとして上々の出来であった。初めは不安で何度も英語の練習をしていた学生が、発表後には海外発表者と交流するのを見ると、国際学会の経験は学生を研究者として一回り大きく成長させるとあらためて感じる。

また今回の国際学会の旅では、分野を超えて多くの若手研究者が果敢に海外へ飛び出している姿を目の当たりにし、その熱量と重要性を痛感した。それと同時に、大学院生時代に無我夢中でIGUの壇上に立ったかつての初心、大学院は研究の場であるという当時の教えを強く思い出させてくれた。残念ながら現在はゼミの垣根を超えて切磋琢磨する空気や、自分の発想で研究に挑む雰囲気は薄れてしまった。大学院は受動的な「勉強」から主体的な「研究」へ移行する場である。失敗や徒労を恐れずに、自分の研究はまず自分でやってみる、この気概をぜひ持ち続けてほしい。

各国の料理やビール、鉄道での罰金失敗談、フェルメールの「地理学者」鑑賞など余談は尽きないが、この辺りはまた授業の機会にでもお話したい。今回の成果を踏まえて、自らの足で歩き、見て、感じることの面白さを少しでも伝えていきたい。（まつい こういち：本学教授）

地理学教室で得たもの

井村 光

2025 年 3 月に関西大学文学部を卒業し、二度目の夏を迎えました。現在、私は日本工営都市空間株式会社に勤務しています。弊社は土木から建築まで幅広い分野を担う総合建設コンサルタント会社であり、私が所属する地理空間情報部では、測量業務や都市計画に関わる地図・基礎資料の作成を行っています。近年、自然災害の激甚化や持続可能なまちづくりへの関心が高まる中、地理空間情報は社会資本整備や防災対策を支える重要な基盤となっています。

社会人二年目を迎えた今年度、私は初めての主担当業務として、ハザードマップ作成業務を担当することとなりました。この業務は、市町が公表している浸水想定や土砂災害などの解析結果、地形データなどを用いて、災害時の危険箇所を分かりやすく住民へ伝える地図を作成するというものです。

業務の中では、学生時代に履修した「応用地理情報システム」の授業内容が驚くほど頻繁に登場します。当時は課題として取り組んでいた空間データの処理や地図作成が今では日常業務となり、仕事に直結していることに私自身も驚きを隠せません。私は決して優秀な学生ではありませんでしたが、ご指導いただいた先生方や共に学んだ同級生に非常に感謝しています。

さらに、社会人になった今、地理学教室で得たものは GIS の技術だけではなく、強く感じています。ハザードマップ作成業務では、解析結果や地形データを地図に落とし込むだけでは十分ではありません。住民説明会や現地調査を実施し、地域特有の課題や実情を把握することも重要な仕事です。

その姿勢は、専修 3 年次の実習調査で学んだことと深く重なっています。巡検では現地に行って調査するだけではなく、その前段階の準備に多くの時間を費やしました。資料や文献を読み込み、地図を確認し、地域の特徴を整理しながら仮説を立てる作業を重ねます。そして現地では、その仮説が正しいのかを確認し、新たな発見があれば修正していきます。

私たちが実習準備を行っている時、先生方からは「調査前の準備で調査の質が決まる」と繰り返しご指導いただきました。学生だった私は現地に行くことそのものに意識が向きがちでしたが、社会人になった今、その言葉の重みを実感しています。社会には「段取り八部」という言葉がありますが、巡検を通して学んだのもまさにその考え方でした。資料や文献を読み込み、地図から地域



ウズベキスタンにて大学同期との一枚

の特徴を読み取り、現地で何を確認するべきかを考える。また、現地へ赴けば、実際に話を聞き、地域の方々が日常の中で感じている困難や課題の把握を通して初めて見えてくることがあります。実習で培われた思考力は、現在の業務においても大きな支えとなっています。

当時は、宿泊実習のことを最後の修学旅行のように考えていた部分もあったので、日々業務の中で専修の学びや思い出を振り返り、感慨深い思いにさせられています。

そんな私ですが、昨年度からは採用活動の一環として関西大学地理学教室を訪問する機会をいただいています。担当の先生方とお話しし、大学院へ進学した同期とも再会しました。校舎を歩いていると、授業や巡検に取り組んでいた日々が自然と思い出されます。そのとき改めて感じたのは、地理学教室で学んだことは単なる知識や技術ではなく、地域や社会を多面的に捉えるための視点そのものだったということです。地理学は文理を横断し、多様なテーマを扱う懐の深い学問です。その中で私は、一つの考え方にとらわれず、さまざまな角度から物事を見つめる姿勢を学びました。

また、学びの場で得られたものはそれだけではありません。興味の赴くままに町を歩き回る体力や、個性豊かな仲間たちとの出会いも、大きな財産です。振り返れば、地理学教室で過ごした時間は、私の世界を何倍にも大きく広げてくれたように思います。

私はまだ社会人二年目であり、学ぶべきことは数多くあります。しかし、地理学教室で得た視点や経験は、これからも私の仕事を支える大切な土台であり続けると確信しています。今後も経験を積みながら、地理学を学んだ一人として社会に貢献していきたいと考えています。

(いむら ひかる：日本工営都市空間株式会社、2025 年 3 月卒業)

■ □ 特別寄稿 □ ■

線路脇の思い出ツアー

野間 晴雄

暮れも押し迫った頃、ハノイ在住で、ベトナム教育訓練省の高官として世界を飛び回っている教え子から一通のメールが届いた。家族四人で年末年始十日間、日本を旅行する。その途次、大学院博士課程の三年間を過ごした母校を訪ね、「トヨツで買い物をしたい」という。

一瞬、トヨツとはどこだろうと首をかしげ、すぐに思い当たった。阪急千里線の豊津駅、そこは彼がかつて暮らした場所である。二十三年前、ここで彼と私は、言葉にはしないが確かな約束を交わしていた。

彼は「若手公務員研修」というベトナム政府の奨学金プログラムで、関西大学最初のベトナム人大学院生として来日した。ドイモイが軌道に乗り、ベトナムが高度経済成長へと離陸しようとする底抜けに明るい時代である。

授業料は全額国費だが、生活費は月 800 ドルぽっきり。日本円で 10 万円に満たず、住居費、食費、研究費のすべてを賄うには心もとない。受け入れ側として、「この条件で必ず学位をとらせる」という無言の約束を背負うことになった。

彼の希望は、家賃 2 万円、シャワー付きの個室。ようやく探し当てたのが、豊津駅をまたぐ天井川の堤防脇に建つ、訳あり独り者しか住まないような木造モルタルの文化アパートだった。中庭を囲む廊下で各部屋がつながるワンルーム。押し入れの一部を改造し、ようやくひとりが立てるだけのシャワーユニット。トイレもエアコンもない。

研究室で一日の大半を過ごし、下宿は眠るための場所となったが、彼は弱音を吐かなかった。国家を背負う選ばれし者として、自分自身への約束がそこにあった

のだろう。

一年後、夏休みに妻が五歳の長男を連れてやって来た。息子は和式の共同便所になじめず、近くのスーパーのトイレを使っていたという。

そんな化石のような廃墟が奇跡的に残っていた。再訪した私たちは、いまにも朽ち落ちそうな階段を 205 号室へ。「ここが、父さんの出発点だった」と、二十五歳になったイギリス留学帰りの息子と、これらから海外留学をめざす娘に語りかける。父のほろ苦い青春の証（あかし）を見せるのも親としての一つの約束なのだ。

下宿脇を毎時 12 本以上の八両編成の電車が轟音をたて鉄橋を渡る。乗りものの好きの息子にとっては、毎日が興奮の連続だった。

当時のハノイではたまにしか来ない長距離列車が人家の密集する市街地を警笛鳴らして徐行し、線路敷では路上商いが繁盛していた。市内バスは旧東欧製のボンコツで使い物にならず、バイクタクシーが庶民の命綱だった。親族で金を融通し合い、バイクを買うことが上昇への階段だった。彼はこの落差を胸に刻み、「国を変える側に立つ」という約束を守るため、若白髪になるまで学び続けた。

豊津駅から千里丘陵を急勾配のカーブを、電車がキーンと軋ませて時速五十キロで切り切ると関大前駅だ。彼の人生の約束をなぞる一筋の通学路がここを並走する。

線路脇にひっそりと赤ちょうちんのスタンド——冬休みの学生飲食街で、ここだけに灯りがあった。プレッシャーと孤独を紛らわすため、通い詰めた店だ。意を決して暖簾をくぐると、女将がひとりテレビを見ていた。彼を覚えていてくれた。二年前にはなじみ客に傘寿を祝ってもらったという記念写真を見せてくれる。カウンター奥の勝手口を出ると、そこは旧駅跡と線路。

「これ、お祝いです!」、そう言って一万円札を女将の手に握らせ、店を出る。通い続けた時間と、きっと母国のために働くという約束へのささやかな返礼だった。

いま、首都ハノイでは都市高速鉄道が開業、市内の路線バスも市民の足となり、自家用車を持つ市民も急増している。かたや日本では、定時に電車やバスが来るという日常が運転手不足で危機に瀕している。

豊津の線路脇でほど交わした無言の約束は、形を変えながらも静かに息づいていた。電車のダイヤほど正確ではないが、人生を次の駅へと運ぶ確かな力として。

(のま はるお：関西大学名誉教授)



ベトナム巡検の思い出

上山 結生

今回のベトナム研修は3月6日から3月14日にかけて行われ、ホーチミンを中心としたベトナム南部に焦点を当てたものであった。

この研修は、私にとって初めての海外渡航だった。物事全てが新鮮に映り、さまざまな面で日本との違いを実感する意義深い時間となったように思う。

その中でも、特に意識を引いたのが、日本との飲食店の差異であった。ベトナム研修中は現地の学生たちに案内してもらい、各地の飲食店を利用した。豪華なビュッフェから大衆的な小規模店舗、果ては屋台と、さまざまな飲食店に出会うことができた。その料理や提供の仕方など、日本とは異なる点が多く見受けられる中、特に私の興味を引いたのは飲み物の提供の仕方である。今回は、この場でそのことについて紹介してみたい。

ベトナムでは、飲食店で飲み物が提供される際、ほとんどの場合は缶もしくはペットボトルで提供される。注文分用意されたそれらを各々が受け取って、自身のグラスに注いでいく形式であった。カフェなどの飲料物に重きを置いた店では、日本と同じようにすでにカップにそそがれた状態で提供されるため、このような傾向はレストランなどの食事をメインにした店で見られるのではないかと考える。食事をメインにした店が、メーカーの商品をそのままグラスに注ぐという手間を簡略化するために、このような形式をとっているのではないだろうか。

また、飲み物を冷やすときは、常温の飲み物に氷を入れて冷やす方法が一般的であった。現地で提供される飲み物自体は常温なことが多く、冷えたまま提供されることは少なかった。そのかわり、店員が氷の入ったバケツを持ってテーブルを常に巡回しており、氷がなくなっているグラスを見つけるとすぐに補充するサイクルが出来上がっていた。飲み物が冷えて出てくることはないが、グラスに注いだ後は常に冷え続けるような仕組みになっているのは、ベトナムの店が野外と隔たりなく面していることが多いことと関係があると考えられる。滞在中も平均

気温 30℃ 程度が普通であった地域の外気に面した店舗では、初めに冷やしたものを持ってきてはすぐにぬるくなってしまう。そのため、常温で提供されたものを、氷を使い自席で冷やし続ける仕組みが定着したと考える。

また、ベトナムの氷は日本で見かける氷と形が異なっている。その多くは円柱の形をして、真ん中に穴があいたような氷であった。これについて現地のベトナム人学生に聞いてみたところ、多くの店でこの氷が用いられていると教えてもらった。彼女によると、家では日本のものと同じような冷蔵庫の製氷機を使用しているとのことなので、店では業務用で販売されている氷を使用していると考えるのが妥当だと思われる。飲み物を冷やすための氷の需要が非常に多いために、業務用の大量の氷を購入することが多いのだろうかと推察した。

また彼女によると、一般家庭でも伝統行事を行う際には、集まった親戚のために大量の飲み物を用意する必要があるため、業務用の氷を買うことがあるとのことだった。そのため、田舎の方でも製氷機の需要がある程度あると聞き、非常に興味深く感じた。

このようなベトナムの飲料物提供の特徴は、気温の違いや店の内装などが関係して構築されたものだと感じる。また、メニューなどもドリンクの種類はアイスがほとんどであり、そのようなさまざまな点で日本との差を感じた。

今回の研修を通して、ベトナムのような熱帯の地域で需要が高い、冷えた飲み物のための氷の需要や経済効果について興味を湧いた。これは日本だけでは得られない視座であり、実際にあの期間ベトナムで過ごし、現地の学生たちとコミュニケーションをとる機会に恵まれたからこそ得られたものであると考える。その点でも、この機会は私にとって非常に意義深いものであった。この経験を支えてくださった先生方、そして案内してくれたベトナムの学生みなさんに感謝したい。

(うえやま ゆう:3 回生)

〈同窓会事務局ニュース〉

- ・12月12日(土)17時より2026年度同窓会総会を開催いたします。
- ・2017年の卒業生に対して、事務局からメールによる消息調査をおこなっています。事務局が把握し該当する卒業生の方にはメールを送付しておりますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。
- ・同窓会通信の執筆寄稿を募集しております。1ページ1600字程度、半ページ800字程度、写真等も可です。執筆いただける方は教室メールアドレス[kandaichiri@gmail.com]までご連絡ください。また、会費の納入状況などのお問い合わせも上記メールアドレスをお願いいたします。

■ □ 1 泊バス巡検報告 □ ■

和歌山の自然と人文

上田 佳典・岡田 滉生

(1 日目：上田担当)

5月9日から10日にかけて、「和歌山の自然と人文」をテーマとした和歌山市・高野山方面へのバス巡検が実施された。1日目の朝、JR和歌山駅前の地下にある「わかちか広場」に集合し、けやき大通りを歩いて和歌山城へと向かった。けやき大通りは、JR和歌山駅と和歌山城を結ぶ市内のメインストリートである。実際に歩いてみると、道幅の広い歩道やシンボルである美しいけやき並木など、整備された道路空間を見ることができた。特に和歌山城付近では大型商業施設や銀行等の業務施設、市役所等の行政施設が集約されており、この大通りが良好な景観と都市機能が集積した地域活性化の空間として機能していることを確認できた。

到着後の自由時間では、和歌山城公園を散策し、天守内を見学した。紀州徳川家の歴史的資料や遺物の数々を観覧した後、天守閣に登った。天守閣からは、和歌山市街のほか、和泉山脈や紀の川、紀伊水道を一望することができた。

和歌山城ホールで昼食をとった後、和歌山城の北にあるぶらくり丁を訪れた。ここは城下町の町人地から発展していき、昭和後期まで県下最大の商業中心地であった歴史ある商店街である。しかし、現地での巡検では空き店舗やシャッターの下りた店が目立ち、和歌山城付近の都市空間とは対照的に活気がなく寂しげな雰囲気があり、郊外化・施設の移転及び撤退・利便性の不足に起因する『中心市街地の空洞化』による衰退の影響を肌で感じられる空間となっていた。一方で、商店街の映画館跡地に帝国座テラスと呼ばれる新たな商業施設が誕生するなど再活性化を目的とした再開発が進行していることを確認できた。

最後に、現地解散地点である南海和歌山市駅前まで移動した。駅に直結するキーノ和歌山は再開発事業により建設された複合施設であり、大規模な市民図書館や商業施設、ホテルが設置されていた。駅周辺には多くの人々が集まっており、再開発事業が和歌山市駅周辺の活性化に繋がっていることを実感した。

これをもって1日目は終了した。2回生は現地解散の後帰路につき、3回生・大学院生は各々市内を自由に散策した後、宿泊先に向かった。

(2 日目：岡田担当)

2日目は、バスでの移動であった。まず、最初の目的地である小豆島（あずしま）輪中集落へ向かった。バスが駐車できる場所の関係上、輪中集落は河川敷から遠目で見ることとなった。輪中は集落や耕地が洪水から守るために堤防で囲まれている。畑作が盛んであり、また畑には灌漑用の井戸が設置されている。

その後、再びバスに乗って和歌山市から岩出市に入り、道中の国道や県道には車社会であることがうかがえるロードサイドショップを車窓から確認できた。

次の目的地は、根来寺・岩出市民俗資料館であった。まず根来寺を拝観した。境内で大塔が特に印象に残った。大塔は外観の迫力もさることながら、中に安置されている仏像や曼荼羅を見て、厳かな雰囲気を感じた。資料館では、岩出市や和歌山県の歴史について知れた。また、地域の伝統品である根来塗も複数見ることができた。

次に、紀の川市の道の駅、青洲の里を訪れた。紀の川市は江戸期の医者、華岡青洲の生誕地であることから、道の駅にもその名前が使われている。バイキング形式の昼食をとった。中でも、高野山の名産でもあるごま豆腐が特に美味しかった。

昼食後は、最後の見学場所でもある高野山へ向かった。その道中の山道の険しさはすさまじいものだった。高野山ではまずバス内から奥の院の様子を見てから、金剛峯寺前の駐車場から各自徒歩で寺院巡りを行った。ここでは、金剛峯寺から不動坂を上り、女人堂に行った参加者や、寺院の近くにあるお店でお土産を買う様子が見られた。

高野山を見学した後は、解散場所の大阪駅へ向かった。途中、高速道路も渋滞が無くスムーズに大阪駅まで到着した。2日間の巡検を終え、参加した3回生・大学院生は満足した表情をしていた。

2日目は、バスの中で説明が行われたことから、実際に車窓から見る風景と説明を聞くことでより理解が深まるテーマもあった。また、この巡検全体を通して実際にまちを歩いて、和歌山県の自然や文化、歴史など多種多様な面から学ぶことができ、有意義な2日間を過ごせたと振り返る。

(うえだ けいすけ・おかだ こうせい：3回生)



特別豪雪地帯における冬季の買い物弱者問題に関する地理学的考察

熊 偉超

1. はじめに

近年、日本では少子高齢化や人口減少を背景に、買い物弱者問題への関心が高まっている。しかし、従来の研究では高齢者や買い物施設までの距離など、平常時のアクセシビリティに着目した分析が多く、降雪・積雪など季節ごとの地理的条件の変化が買い物行動に与える影響はまだ十分に検討されていない。特に、特別豪雪地帯を含む豪雪地帯は日本国土の広い範囲を占めており、人口減少や高齢化といった社会問題も他の地域よりも先に進んでいるため、冬季の買い物弱者問題を地理学の視点から検討する必要がある。

そこで、本研究は特別豪雪地帯に指定されている福井県大野市および滋賀県長浜市余呉町を研究対象地域として、空間分析とアンケート調査を用い、特別豪雪地帯における冬季の買い物困難がどのような空間的・社会的条件のもとで生じるのかを地理学的視点で明らかにする。

2. 空間的分析の結果

本研究の空間的分析では、大野市と余呉町を対象に、政府公開データと現地調査で得られた情報を用い、QGISによる空間分析を行った。その結果、両地域では2000年から2020年にかけて高齢化が進行しており、中心市街地だけでなく、郊外部・山間部にも高齢化率や単身世帯率の高い小地域が分布していることが確認された。なお、全体的な傾向としては、中心市街地よりも郊外部・山間部において高齢化率が高い小地域が多くみられる。ただし、これらの地域では総人口が少ないため、高齢化率が相対的に高く算出されやすい点にも留意する必要がある。

また、生鮮食料品を扱う買い物施設が、中心市街地または低標高で人口が比較的に集中する地域に立地する傾向が確認された。これらの地域では、買い物施設や公共交通への近接性も相対的に高く、平常時の空間的アクセシビリティは比較的に確保されている。一方で、郊外部・山間部、高標高の小地域では、高齢化率や単身世帯率が相対的に高く、買い物施設や公共交通への近接性が低い地域もみられた。すなわち、特別豪雪地帯における買い物アクセスの不利は、市域全体に均一に分布するものではなく、地形条件、居住地域の分布、買い物施設の立地が重なり合うなかで、空間的な分化を示している。

このような空間構造のもとでは、周辺部・山間部では

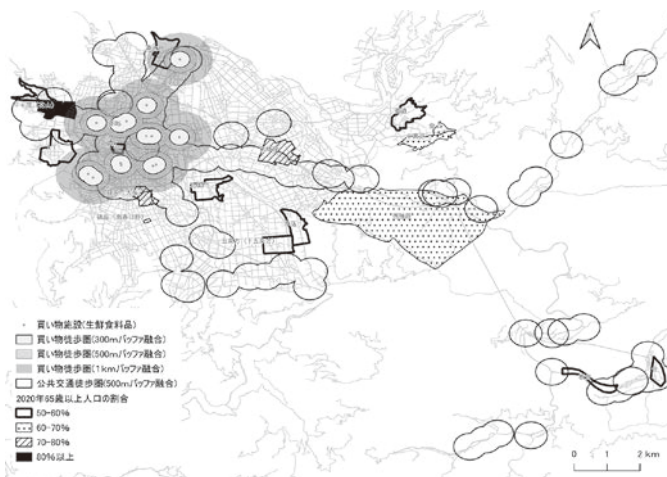


図1 大野市における高齢化率が高い小地域と生鮮食料品買い物施設徒歩圏・公共交通徒歩圏
(現地調査、国土数値情報、e-Stat2020年国勢調査小地域集計および500mメッシュ人口データをもとに作成)

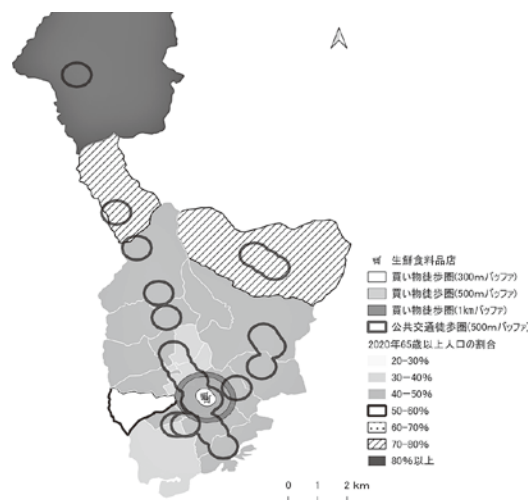


図2 余呉町における生鮮食料品買い物施設徒歩圏・公共交通徒歩圏と高齢化率の分布
(現地調査、e-Stat 2020年国勢調査小地域集計、国土数値情報をもとに作成)

買い物施設が少なく、店舗までの移動距離や所要時間が長くなりやすい。したがって、周辺部・山間部では、平常時から存在する空間的不利が、冬季にさらに強まる可能性がある。さらに、両研究対象地域でも移動販売が買い物施設徒歩圏外の地域を補完する手段として確認できる。ただし、運行頻度、品揃え、停留所までの距離などには制約もみられる。

3. 大野市で実施したアンケート調査の分析結果

大野市で実施したアンケート調査を用い、冬季の特別豪雪地帯における買い物困難の実態を分析した。その結



(a) 積雪により狭小化した歩道 (b) 圧雪・凍結がみられる歩道

写真1 大野市中心部における冬季の歩行環境

筆者撮影 (2026年2月4日)

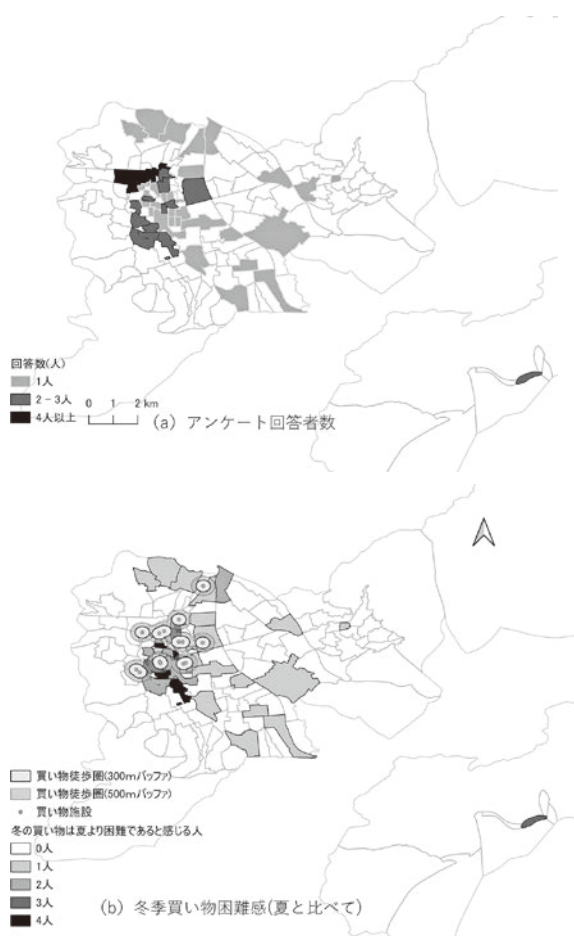


図3 郵便番号別にみたアンケート回答数と冬季買い物困難感の分布
注：郵便番号単位で集計した。背景の小地域境界は、居住人口が0人の小地域を除外して表示した。

(2026年2～3月実施アンケート調査より筆者作成)

果、大野市でのアンケート調査の範囲では、年齢層や交通手段にかかわらず、冬季の買い物を夏季より困難と感じる回答者が多いことが確認された。とくに、道路の積雪・凍結は、冬季の買い物困難を生じさせる主要因として位置づけられる。なお、自宅周辺道路の除雪に満足と回答した回答者の中にも、76%が冬季の買い物に困難を感じている。このことから、自宅周辺道路の除雪状況が良好であっても、冬季の買い物困難は必ずしも解消され

ないことがわかる。

また、冬季には外出回数や買い物回数の減少、1回あたりの購入量の増加、荷物運搬負担の増大、購入不能経験などがみられ、多くのアンケート回答者の買い物行動が夏季とは異なる形に変化していることが示唆された。具体的に見れば、冬季には積雪や路面凍結により外出回数が減少し、それに伴う買い物回数も減少する傾向がある。その結果、1回あたりの購入量が増加し、より多くの商品をまとめて購入できる店舗への需要が高まると考えられる。スーパーは、生鮮食料品を含む品揃えが比較的豊富であり、食品や日用品を一度に購入できる点で、冬季の買い物行動において重要な役割を担っている。

個別の買い物先別にみると、冬季にはスーパー以外のコンビニ、ドラッグストア、個人商店などの利用減少がみられる。これに対して、移動販売や宅配サービス、生協などの利用規模は小さいものの、冬季に大きく減少していない。このことから、冬季には実店舗へのアクセスが制約される一方で、移動形・非対面形の利用は比較的維持されていることが確認された。さらに、郵便番号を用いた補足的な分析からは、回答者が中心市街地周辺に偏るという限界はあるものの、買い物施設への近接性が比較的高い地域においても冬季の買い物に困難があることが確認された。

4. 考察

中心市街地周辺のように買い物施設への近接性が比較的高い地域であっても、冬季には積雪、路面凍結、歩道・駐車場の除雪状況、買い物後の荷物運搬、自宅周辺や敷地内の除雪負担などによって、買い物負担が高まる。特別豪雪地帯では、買い物施設までの物理的距離が近い場合でも、冬季の降雪・積雪による移動に要する時間的・身体的負担が大きくなり、実質的な買い物アクセシビリティが低下する。

この点からみれば、冬季の降雪・積雪は、単なる気象現象にとどまらず、住民の買い物アクセシビリティを季節的に変化させる地理的条件として作用し、特別豪雪地帯における冬季の買い物困難は、特定の住民だけに生じる問題ではなく、幅広い住民に生じうる生活課題として捉える必要がある。

さらに、この影響は、発生時期にも明確な偏りがみられる。アンケート調査では、降雪によって買い物が大変だと感じる月が1月・2月に集中しており、この時期は月別降雪量や月別最深積雪が大きくなる時期とも対応していた。したがって、大野市における冬季の買い物困難は、降雪の増加と積雪の累積によって道路条件が悪化する時期に顕在化する季節的問題であるといえる。

(ゆう いちよう：2026年9月文学研究科・博士課程前期課程修了)

新専修生からの
ひと言

伊藤孝輝
子どもの頃は世界地図をよく見ていました。よろしくお願ひします。

梅川 仁
旅行が好きで国内、海外ともに色々な国に行ったことがあります。なので地理学の授業でフィールドワークが楽しみです。

岡田高典
はじめまして。旅行や鉄道が好きで地理学・地域環境学専修を希望しました。地理的なことにも興味があるのでこの専修での活動が楽しみです。よろしくお願ひします。

海野采羽
高校で地理に出会い興味を持ち始めました。旅行が好きで長期休みは色々な場所を観光しています。これから地理学をたくさん学べるのが楽しみです。よろしくお願ひします！

笠原悠太郎
昔から地形や天候といった自然の地理が好きで、地理学専修に入りました！これから仲良くしてください、よろしくお願ひします！

金谷百花
学びの扉と知パスの授業が楽しかったので希望しました！日帰りで色々な場所に行くのが好きなのでフィールドワーク楽しみです。これからよろしくお願ひします！

神田篤樹
2回生の神田篤樹です。将来は、交通機関に関わる職業に就きたいと考えています。一生懸命勉強していきたいと思っているので、今年度から3年間よろしくお願ひ致します。

北川夏希
こんにちは。知パスが楽しかったため地理学専修を希望しました。散歩が好きなのでフィールドワークが楽しみです。よろしくお願ひします。

見上伸康
私は昔から地理に関することが好きでした。テストでは歴史や公民よりも得意だし、地図を見ることも好きでした。高校で学んだ社会は世界史でしたが、結局大学受験で使ったのは地理でした。大学に入って自分が入った学部で地理を学べる専修があることを知った時はとても嬉しかったです。大学3年間で様々な地理についてのことを学びたいです。

卒業論文及び修士論文一覧（2025 年 9 月，2026 年 3 月・9 月，卒業・修了）

〔2026 年 3 月期卒業論文〕

浅野 まゆ	天理教の大教会の分布について
東 祐輝	高槻城における中世から近世にかけての城郭及び周辺環境の変遷に関する研究
磯 翼	泉州タオルのブランド戦略と発展可能性—今治タオルとの比較を通して—
上野 桜祐	シェアサイクルが地域交通において果たす役割—大学生の生活圏拡張に着目して—
奥田 文香	都心高層住宅居住者のスーパーマーケットの選択—大阪市北区・中央区・阿倍野区を事例に—
海原 紬希	田辺市における着地型観光の展開とその空間的偏在—熊野ツーリズムビューローと観光事業者の関係に着目して—
加藤 由衣	宝塚ブランドを活用した観光振興とにぎわい創出—ウィルキンソンを事例として—
亀井 珠菜	長野県における小児要支援者の避難経路計画—誰ひとり取り残さない避難を目指して—
木下 康太	阪神間鉄道3路線におけるイメージ形成要因の検討
後藤祥次郎	JR 吹田駅周辺商店街における地域差に関する研究
後藤 爽	JR 吹田駅周辺商店街における地域差に関する研究 投資としての距離
品川 蒼	兵庫県におけるジビエ利用の現状と課題—丹波篠山市を事例として—
杉本 珠美	モスクの個性化とムスリムのモスク選択—神戸市における二つのモスクの比較から—
須田明日香	大阪府池田市における大地震発生時の観光客対応の検討
巽 愛華	大阪府柏原市における観光農園の来訪者—利用実態と観光農園の抱える課題—
田中 悠介	山間地域における野生動物の集落への侵入経路と移動—兵庫県丹波篠山市を事例に—
田村 昌工	岐阜県の内水面漁業の現状とこれから—淡水魚養殖と河川漁業—
丹 悠真	鉄道延伸の土地利用及び都市構造に与える影響—箕面市・北大阪急行電鉄延伸事業を事例に—
中川 詩織	地域における女子サッカーの形成と展開—兵庫県神戸市を事例として—
中所こまち	農業における若手人材の参入に向けて—奈良県奈良市の新規就農者を事例に—
鍋倉 夕葵	現代アートを用いた芸術祭が離島で成功した理由—アートサイト直島と瀬戸内国際芸術祭から見る離島空間の可能性—
林 大耀	街路ブロック塀の危険度と避難経路の実用性—大阪府守口市を事例として—
福田 穂香	岡山市千種地区「モモタク」から考えるエリアデマンド型デマンド交通の運営
古市美咲希	在日外国人の生活空間・社会関係の形成と日本語能力—大阪府八尾市における在日ベトナム人を対象として—
三好 彩香	防災教育における効果的な授業とは何か—ゲームによる授業の実践を通して—
村上 洸基	河川ごみの実態についての調査と研究—広島県福山市芦田川を事例として—
吉田 太陽	大阪府中央区における自転車盗難発生の環境要因—犯罪機会論の視点から—
渡邊 太陽	都市構造と交通事故リスクの地域性に関する研究—大阪府高槻市と東大阪市の比較分析を通して—
鎌田 優大	桂川流域におけるヌートリアの分布の変遷

〔2025 年 9 月期修士論文〕

肖 逸欣	中国・京津冀地域におけるコンビニエンスストアの多様化に関する地理学的研究
------	--------------------------------------

〔2026 年 3 月期修士論文〕

于 凡茜	コンテンツツーリズムによる地域復興に関する地理学的研究
王 競東	企業城下町における産業遺産の保全と活用に関する研究—新居浜市を事例に—
郝 玉朋	京杭内河道と済寧港の変遷に関する経済地理学研究—石炭輸送の成長に注目して
虞 嘉誠	地方都市における公共交通ネットワークの役割と維持—富山県高岡市を例に—
佐伯雅優美	高校地理教育における ICT 活用と教育効果の検証—空間認識の形成と野外調査の補完可能性に着目して—

〔2026 年 9 月期博士論文〕

徐 雨辰	東アジア島嶼部における近世甘蔗製糖業の展開と技術の地域差—台湾・沖縄・奄美・讃岐の比較—
------	--

教室だより

■令和8（2026）年度の地理学・地域環境学専修に分属された2回生は17名、編入生が1名でした。大学院博士課程前期課程には5名が入学しました。7月末現在、2回生は17名、3回生は37名、4回生は36名、博士課程前期課程2名、博士課程後期課程10名、計102名となります。

■恒例の5月の「地理学・地域環境学実習」のバスによる1泊巡検は、5月9日（土）～10日（日）に紀北地域（和歌山市、岩出市、高野町）において一泊二日で実施しました。

■大学院合同演習は、昨年と同様に関西大学千

里山キャンパスで7月18日（土）に実施しました。大学院生9名の発表がありました。

■教員の外国出張（2026年4月～9月）

松井幸一：8月15日～8月21日（トルコ・IGU イスタンブール地域会議に出席）、8月22日～8月26日（ドイツ・現地調査）、8月27日～8月31日（ポーランド・EAJS 国際会議に出席）

■集中講義 2026年7月24日（金）、25日（土）、27日（月）に大学院博士前期課程向けの「人文地理学特別研究」に吉田国光先生（専修大学教授）にご出講いただきました。

秋の日帰り巡検のご案内

関西大学地理学同窓会（旧・関西大学地理学研究会）の恒例行事ともなっている教室の日帰り巡検を、2回生の案内を中心にして、以下の要領で実施します。今回の巡検は、大津と山科を対象に、自然、産業、歴史を見て回ります。一部は京阪電車を利用します。昼食は三井寺にて全員でとります。

参加を希望される方は、9月27日（日）までに氏名、メールアドレス、携帯電話番号を同窓会事務局（kandaichiri@gmail.com）までお知らせ下さい。

テーマ：大津・山科の自然と人文

日程：2026年10月4日（日）雨天決行

集合：JR 大津駅前ロータリー 10：00

コース：JR 大津駅前で説明 10：00～旧東海道・アーケード・琵琶湖疎水 10：30～三井寺（れすたらん風月）で昼食および説明 12：00～自由見学（三井寺、琵琶湖疎水など） 13：00～大津市立博物館【再集合】 14：00～大津市役所前駅 15：11（間に合わなかった場合は 15：21、京阪石山坂本線・石山寺行）～びわ湖浜大津駅（京阪京津線・太秦天神川行） 15：32～四宮駅 15：43～疎水公園で説明～山科駅（JR・京阪・地下鉄）にて現地解散 17：00 頃

費用：2,200 円 昼食代・入館料等む。交通費は各自、実費。

教室創設 60 周年記念事業

2027 年に地理学教室は創設 60 周年を迎えます。教室・同窓会は共同で 60 周年記念事業を開催予定です。

1. 60 周年記念パーティーの開催

2027 年 12 月 11 日（土）に 60 周年記念パーティーを予定しています。詳細は決まり次第「千里地理通信」と HP でお知らせします。

*パーティーに参加いただける方には『千里地理成長期 4』をお渡しします。

2. 『千里地理成長期 4』の刊行

2020 年以降の教室の記録と卒業生からのエッセイを掲載した『千里地理成長期 4』を刊行予定です。詳細は下記『千里地理成長期 4』の原稿募集をご覧ください。

*『千里地理成長期 4』の原稿募集

『千里地理成長期 4』の刊行に向けて卒業生の皆様からの原稿を募集します。

体裁：A5 サイズ

執筆要項：1 頁あたり 33 字×33 行

分量：1 人あたり 2 頁まで。写真の入れ込みも可。

原稿提出期限：2027 年 6 月 30 日

刊行予定：2027 年 12 月

提出先：google フォームまたは教室メール

google フォーム <https://forms.gle/jpRHqmjiGYEeCA5s8>

*アップロードには google アカウントでのログインが必要です。

教室メール kandaichiri@gmail.com

小西一輝

教科書のコラムにあったウェーバーの工業立地論に興味を持ち、旅行が好きであるため地理学専修に進みました。フィールドワークも徒歩圏内の去年より遠くに行けることもあり楽しみです。卒業までよろしくお願いします。

渋谷健太

旅行が好きで地理学専修を選びました。地図を見ること、歩くことも好きなので、フィールドワークで色々なところに行けるのが楽しみです。これからよろしくお願いします。

杉本紗也子

旅行や自然が好きなので、地理学を通してそれぞれの地域の多様性や特色を学んでさらに旅行を楽しめるようにしたいです。

中原太陽

フィールドワークに積極的に取り組み、実践的な力を身につけたいです。よろしくお願いします。

野村依那

自然地形や旅先の風景を見るのが好きで地理学専修を選択しました。専門的に学んで地域等への理解を深めたいです。よろしくお願いします。

吉田健悟

はじめてですが、今年から地理学・地域環境学専に所属になりました。私は旅行などが好きなことや地理について興味があったため所属することを決めました。地理について学ぶことが楽しみです。これからよろしくお願いします。

渡部裕太郎

初めまして。文学部 2 回生の渡部裕太郎です。ゆうたんと呼んでいただけたら幸いです。旅行が趣味であり、食べ物巡りとか観光名所が好きです。よろしくお願いします。

渡邊涼太

こんにちは。小さい頃から旅行とアウトドアが大好きで、よく山登りや思いっきり旅行に行っています！最近ではフェリー旅にハマっていて定期的に乗らなければ禁断症状が出てしまうほど重症ですがどうか温かい目で見守ってください（笑）。よろしくお願いします。

〈大学院生〉

高航

地理学教室の皆さんと一緒に学び、充実した時間を積み重ねていたら嬉しいです。酸いも甘いも、どちらも美味しいと思える一年にしたいです。

私の関西大学入学は1977年4月、そこから金沢経済大学（現金沢星稜大学）に講師として赴任したのが1991年4月、この間たいへん長くお世話になり、今は非常勤講師としてお世話している（ただし金銭的なものさしでみると、この逆であるが）。千里地理通信に関しては、発刊早々の学部4年次に「三河巡検だより」、大学院時代に「欧州旅行記」、金沢赴任直後に「卒業生だより」と執筆してきたが、今回、集大成とも言える巻末執筆の依頼を受けた。

金沢に赴任するまで、ずっと大阪郊外（北摂・阪神間のような洗練されたところではないが、）で暮らし、その時から郊外研究が専門である。そして四半世紀、金沢から佐世保と地方で過ごし、2017年に回遊魚のようにピンポイントで出身地に戻ってくることができた。

地方暮らし中、あたりを散策やドライブしていると、「なんで自分は今、ここにいるのだろう？」と、不思議に感じた。いうまでもなく専門的な仕事を目指す場合、場所にこだわってはいられない。また地方の学生たちが就職で地元を離れたがらないのに憤慨して、毎年、授業中に「高学歴ほど就職先の距離が延びる。これが地理学の法則だ。」と、わけのわからん檄を飛ばし、学生たちが遠くの世界へ羽ばたくように仕向けていた。その私が回帰してしまったので、もともこもない。

さて本題に入る。「地理学者あるある」かもしれないが、私は読書があまり好きでなかった。じっとしてられないというか、アウトドア派だったのだろう。30年前、数理地理学者の杉浦芳夫氏が『文学のなかの地理空間』という著書を出された。間違っていれば申し訳ないが、うわさでは氏は、地理学者としては珍しく、旅行嫌いでデスクワーク派であったと伺っている。

読書嫌いでも、地理ネタがたくさんふくまれる物語などは、好んで読んだ。最初に戸川幸夫の動物文学がある。小学校時代から読んだ。本人の紹介に、専門は動物地理とも書いてあって驚いた。この作家の小説は短編が多く読みやすかった。なかでも冬の知床で、鼠捕り用の猫とともにニシン番屋で孤独に過ごす老人の人生の回想を描いた『オホーツク老人』は道東の自然環境が犇々と伝わる名作だった。これは映画化された。また、タイトルは忘れたが、ハブを題材にした話では、熱帯カルストの洞窟、ガマ（岩陰墓）での沖縄独特の葬儀の風習など興味深かった。

海外作品では、スタインベックやアルフォンス・ドーデの作品をよく読んだ。どちらも短編があり、興味のある地理情報がたっぷりあり、読み疲れしなかった。スタインベックの作品に関しては、映画から入ったものもあるが、アメリカ西海岸の情景がリアルに描かれていると感じた。映画化された兄弟の葛藤を描いた『エデンの東』では、父親が冬でも野菜が採れる西海岸から、鉄道貨物を使って東部市場に輸送して儲けようとしたところ、山脈横断中の雪崩で列車が動かなくなって、大損する場面があった。『キャナリー・ロウ』では、西海岸の小さな漁港にある缶詰工場が登場するが、これは水産地理学ネタであろう。映画で有名になった『怒りのぶどう』は、オクラホマの農場を手放すこととなった大家族が、カリフォルニアの発展を聞いて、ポンコツトラックで大移動することとなるが、果樹園の貧しい日雇い農民になり下がる話だった。この時の移動に使った「ルート66」は、今でもシーニックバイウェイとして有名である。

ドーデも短編小説が多い。『風車小屋だより』や、タイトルは忘れたが、学生時代フランス語で、必死に読んだ南フランスの移牧をテーマとした短編。学校で習ったスイスの移牧とは全く異なり、こどもでも扱いやすい

羊・ヤギなどの家畜が登場し、姥捨て山のように夏休みの初め、親に家畜と一緒に山に連れられて、置き去りにされるという悲しい話であった。

私のこどもの頃、小学校の国語の教科書に『最後の授業』がよく載っていた。私の世代は、よく知っていると思うが、最近は見かけない。黒板に書かれた *Vive la France*（パン屋の *Vie de France* ではない）という文字を覚えている人もいるかもしれない。アルザスの学校を舞台にしたお話で、ドイツ領になったので、「今日で私の国語の授業は最後です。」と言って、先生が去っていく悲しい物語を装っていた。児童に「勉強できるときにしっかりと勉強せよ」と伝えたかったんだと思う。でも地理を勉強すると、ここにはアルザス人がいて、独仏に挟まれ、両大戦間に独仏領を二往復し、その間に国語も入れ替わったということで、アルザス人の立場から言っていると、言語的に大国に純化されるというお話、と気づいてしまった。今の教科書に載らないのはそういう理由なのかもしれない。

最後に小説やそこから派生した映画の話ではなく、アニメの話をしたい。最近のアニメには、忠実に風景が描かれ、聖地化され観光に貢献しているものが多い。すぐに場所当てができるので面白くないが、私がジブリのアニメ作品で、地理ネタとして、また私の研究の舞台として気に入っているものがある。ジブリのアニメは、『魔女の宅急便』のように、北欧なのか南欧なのか、さっぱり国当て・地域当てができないものもあるが、『となりのトトロ』を初めて見たとき、一生懸命考えた。高度経済成長期前の東京郊外が舞台となっている、というところまでは、私が育った大阪郊外の環境とそっくりだったので、すぐわかった。決して、のどかな農村地帯ではないことも。山が見当たらなかったのも、東京通勤エリア内の千葉県あたりかと思っていた。ネット情報を得るようになって、埼玉と東京にまたがる狭山丘陵であることを知った。

郊外の変貌を目の当たりに体験したものとしては、その後の急激な変化も気になるところである。ジブリの作品には、その後の東京郊外を舞台にした作品が二作ある。開発中の郊外、造成中の多摩ニュータウンを描いた『平成狸合戦ぽんぽこ』、成熟した郊外である京王聖蹟桜ヶ丘駅周辺を描いた『耳をすませば』、この三本は私の郊外研究にもつながるところがあって、大変興味深いものである。

『文学のなかの地理空間』では、近代小説の舞台となった東京郊外が登場するが、こうした作品には、私の地理学者としての道や郊外研究に、たくさんの刺激や夢を与えてもらい感謝している。そういえばジブリの工房も東京郊外、ジブリの作品の主題歌によく使われた松任谷由実さんも東京郊外出身だったなど、余計なことを思い出した。

（いしかわ ゆういち：大阪商業大学教授）

千里地理通信 第95号

2026年9月30日 発行 (300部)

関西大学地理学教室 関大地理同窓会

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内

編集担当：松井幸一

TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）

e-mail：kandaichiri@gmail.com

http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/

郵便振替：大阪 00970-4-81149

*教室の最新情報、過去の千里地理通信はQRコード先の教室HPからご覧いただけます。

